

地域医療連携だより

# かまんざ

## 京滋地区初

## 人工膝関節手術支援ロボットを導入

### | 新任部長紹介

呼吸器外科 部長 柳田 正志…2

### | 特集

手術支援ロボットを導入、より患者さんに合った人工膝関節を実現…3

### | Red Crossニュース

スクラムを組む医療従事者たちVol.2 骨粗鬆症リエゾン外来チーム…4

### | トピックス 第32回 病病・病診連携懇話会を開催しました…6



当日紹介・予約・診療に関するお問い合わせ

地域医療連携係 TEL **075-212-6186**

平日 8:30~20:30  
土曜日 9:00~13:00

## 新任部長紹介

# Uniportal VATSで 低侵襲手術を 幅広く提供していきます

呼吸器外科  
部長 柳田 正志

### 所属学会・認定資格

- 日本外科学会指導医
- 日本呼吸器外科学会評議員
- 日本胸部外科学会認定医
- 日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡指導医
- 肺がんCT検診認定機構肺がんCT検診認定医
- 日本臨床外科学会評議員

2021年7月より呼吸器外科部長を拝命しました、柳田正志です。2014年から2018年の約4年間当科に在籍していた経歴があり、今回は2度目の勤務となります。

当科では、原発性肺癌をはじめとした肺腫瘍から縦隔腫瘍、気胸・膿胸などの良性疾患、また手掌多汗症の外科的治療も取り扱います。ほぼ全ての疾患において可能な限り低侵襲な胸腔鏡下での手術を行うよう心掛けています。特に若年者の気胸症例については単孔式胸腔鏡下手術(Uniportal VATS)を導入し、手術創は約2~3cmの傷が1カ所のみという整容性に優れた術式を採用しています。今後はさらにUniportal VATSを

早期肺癌の手術症例にまで適応を広げ、より低侵襲な手術を提供していきたいと考えています。

当科は2010年に開設され、当初は年間100例に満たない手術件数でしたが、現在では200例近くの手術症例をこなすようにまできています。これもひとえに近隣の先生方からのご紹介のおかげと思っております。この場を借りて心より御礼申し上げます。

今後も日々の研鑽を忘れることなく、地域に密着した病院として医療を提供できるよう努めてまいりますので、ご指南賜りますようお願い申し上げます。

■ 呼吸器外科 診察日：月・水・木

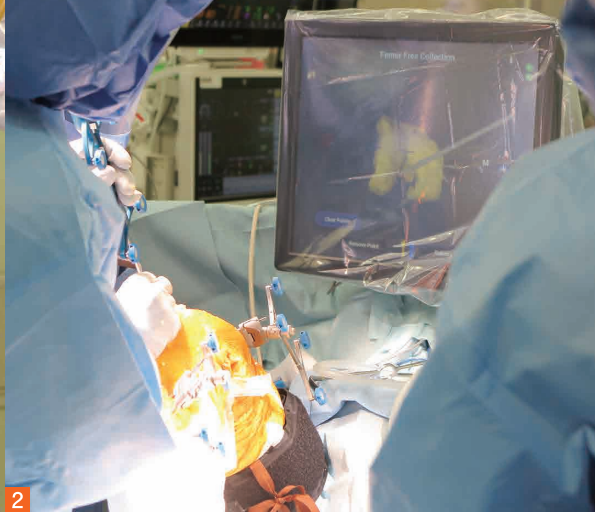
## Uniportal VATSによる自然気胸の手術



胸腔内に内視鏡を挿入、モニターを見ながらの手術



約2~3cmの手術創



- 1 2 赤外線カメラで関節の位置を取得し、モニターを見て手術
- 3 赤外線誘導式人工膝関節手術支援ロボット

## 手術支援ロボットを導入、より患者さんに合った人工膝関節を実現

2021年8月に京滋地区としては初めて赤外線誘導式人工膝関節手術支援ロボットを導入しました。この手術支援ロボットは変形性関節症、関節リウマチ、骨壊死などに対する人工膝関節置換術で使用できます。

人工膝関節置換術ではインプラントの設置位置や、靭帯のバランスが非常に重要であるにもかかわらず、従来のナビゲーションシステムでは骨を切るときは通常の手術と同様のボーンソーを使用していたため、プ

レによる誤差が生じる可能性がありました。しかしこのロボットは、1mm、1°以下の誤差で正確に掘削できるため、患者さん固有の靭帯バランスを考慮した、最適な人工関節を設置することが可能となりました。特に、通常は切除することが多かった前十字靭帯を温存する手術にも応用できるので、活動性が高い患者さんでも自然な屈伸動作が誘導され、より高い安定性とADL動作が期待できます。

■人工膝関節手術件数

2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
112	99	158	106

(件)

■ 整形外科 医長

ひらい なおふみ  
平井 直文

日本整形外科学会専門医  
日本整形外科学会スポーツ医

# 骨粗鬆症リエゾンチーム



## 地域一体となったOLS活動で骨粗鬆症を予防していきます

### 骨粗鬆症の現状と橈骨遠位端骨折に対するOLS活動のきっかけ

2019年の国民生活基礎調査の結果をみると、要支援となった原因疾患では関節疾患が最も多く、骨折・転倒と合わせると全体の3分の1を占めており、運動器疾患に対する取り組みが非常に重要であることが分かります。骨粗鬆症患者さんは全国で1,280万人と推定されていますが、骨粗鬆症検診の受診率は5%程度、さらに治療を受けている人は約200万人ともいわれ、治療率の低さが問題視されています。

また、骨折の手術後に骨粗鬆症治療を開始しても、1年以上治療継続できたのは36.4%のみであるという報告もあり、骨粗鬆症治療の継続は難しいことが窺えます。そこで、当院では2015年に骨粗鬆症専門外来を開設、2018年に整形外科の外来看護師と放射線技師が

骨粗鬆症マネージャーの資格を取ったことをきっかけに、骨粗鬆症リエゾンサービス(OLS)活動を開始しました。OLSとは多職種で骨粗鬆の予防、治療を行うチーム医療のことです。

橈骨遠位端骨折は、受傷時年齢が比較的若いことが多く、初発骨折の部位としても重要であり、椎体骨折、大腿骨近位部骨折と並び頻度の高い脆弱性骨折です。また、その後の要介護のきっかけとなる二次骨折を防ぐための「お知らせ骨折」とも呼ばれています(図1)。橈骨遠位端骨折の患者さんに骨粗鬆症治療を開始できれば、将来寝たきりの原因となる椎体骨折、大腿骨近位部骨折が予防できるのではないかと考え、橈骨遠位端骨折に対するOLSに積極的に取り組んでいます。

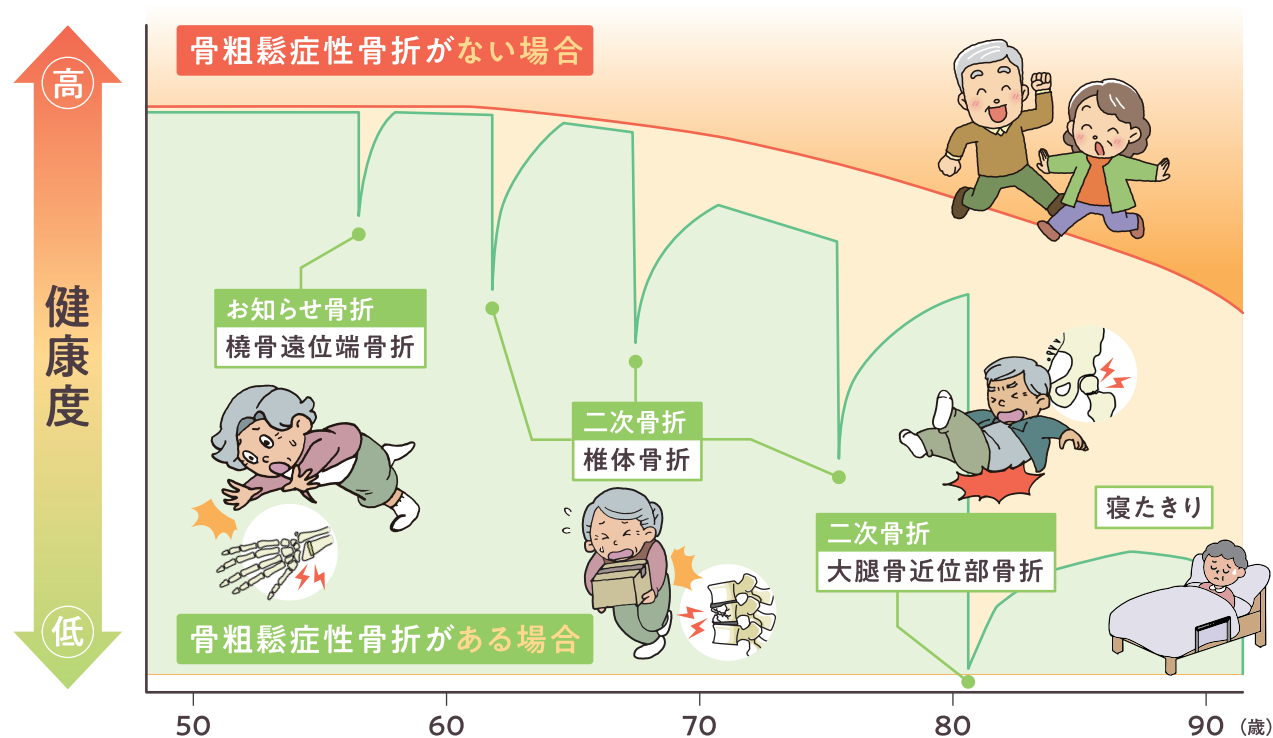
### 今年の8月に骨粗鬆症リエゾン外来を開設しました

OLS活動を始めて3年が過ぎ、多くの患者に骨粗鬆症治療を開始し、一定の成果は得られましたが限界

も見えてきました。基幹病院だけで骨折後の患者さんを生涯にわたって骨粗鬆症治療を行うには無理があ

当院では、院内の他職種と連携し、職員がチーム一丸となって患者さんに最適な医療を提供しています。  
このコーナーではリレー形式で各部・室の現状について語っていただきます。

【図1】骨粗鬆症性骨折がある場合とない場合の健康度グラフ



り、どこかで地域連携が必要になります。そこで、今年の8月に地域連携の拠点となる骨粗鬆症リエゾン外来を開設しました。

リエゾン外来では、骨粗鬆症の診断、治療の導入を行った後に、骨粗鬆症治療に協力いただけるクリニックの先生方に紹介し、骨粗鬆症治療を継続していただきます。半年ごとにリエゾン外来を紹介受診していただき(予約済み)、当院でDEXAによる骨密度評価を行い、必要に応じて栄養・服薬指導、リハビリを行わせていただきます。診療情報提供書の代わりに、クリニックの先生に、なるべく手間のかからない簡単な経過報告書を使いたいと考えています(図2)。半年に1度、治療状況をFAXで送っていただくことで、診療情報提供料が算定できます。

骨粗鬆症治療は地域一体となって患者さんの治療を行っていくことが重要です。先生方のリエゾン外来に対するご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

(整形外科 部長 藤原 浩芳)

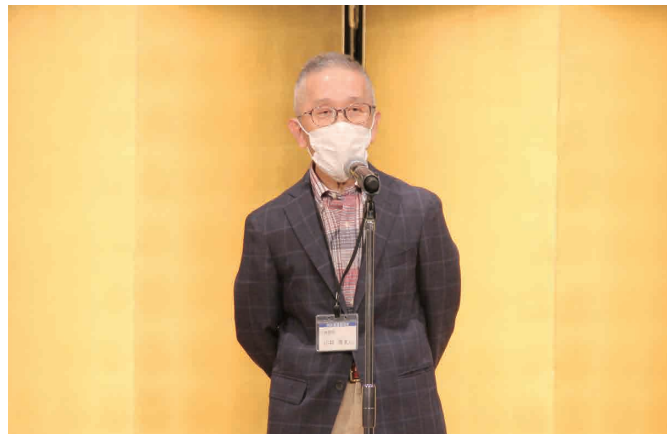
【図2】経過報告書(イメージ)

診療情報提供書 地域連携パス経過報告書	
患者氏名	性別 男 ・ 女
生年月日 M・T・S 年 月 日	年齢 歳
診療所名	主治医
連携病院 京都第二赤十字病院	骨粗鬆症リエゾン外来 担当医
次回骨密度検査 有 ・ 無	R 年 月 日 ( ) : ~
リエゾン外来予約時間	R 年 月 日 ( ) : ~
<b>治療の現況</b>	
治療アドヒアランス	良好 ・ 普通 ・ 不良
新規骨折の有無	有 ・ 無
背部痛などの自覚症状の有無	有 ・ 無
骨粗鬆症治療薬の変更	有 ・ 無
	有の場合・・・処方変更内容
	( )

## 第32回 病病・病診連携懇話会を開催しました



ソーシャルディスタンスを保った会場



上京東部医師会長 小林雅夫先生によるご挨拶



上東医師会 上羽毅先生によるご講演



京都大原記念病院副院長 三橋尚志先生によるご講演

2021年7月15日、京都ホテルオークラにて第32回 病病・病診連携懇話会を会場参加、Web参加の両方で実施する「ハイブリッド形式」で2年ぶりに開催いたしました。また、それに先立ち2021年度 第1回地域医療支援病院推進委員会を同ホテルで実施いたしました。懇話会には地域医療機関から会場参加43名、Web参加70名にご参集いただき、当院からも診療部長・副部長をはじめとする多数の病院職員が参加し、盛会裏に会を催すことができました。関係各位に感謝申し上げます。

本年度はこれまでと少し趣を変え、前方連携および後方連携それぞれの医療機関からお話をいただくこととしました。まず、上京東部医師会長 小林雅夫先生にご挨拶いただき、続いて上羽医院院長 上羽毅先生に「前方連携医としての役割と現状について」と題してご講演をいただきました。その後当院新任部長の挨拶と休憩（懇親の時間）を挟んで、後半は後方連携医療機関から京都大原記念病院副院長 三橋尚志先生に「地域連携における回復期リハビリテーション病棟の役割」という演題で講演をいただき、最後に当院感染制御部部長 盛田篤広から「当院

のCOVID-19感染対策について」という題でこの1年半の当院の新型コロナウイルス感染症への取り組みを紹介させていただきました。上羽先生からは、初診時だけではなく、退院時・転科時・転院時の返書の重要性をご指摘いただき、三橋先生からは2000年からの回復期リハビリテーションでの新しい流れをご教示いただき、紹介・転院のタイミングについて示唆に富むお話をいただきました。

今後、当院は地域医療連携・入退院支援室を中心に一層地域医療機関との連携を深めさせていただく所存です。返書のさらなる充実、意見交換でもご要望があった紹介患者を中心とした症例検討会などの勉強会の開催、また当院が現在検討している地域医療連携システムの導入を早期に実現することで地域医療機関からのご要望に迅速に対応し、より一層支持される病院になれるよう病院職員一丸となって取り組んでいきたいと思っております。地域医療機関の皆さんのご指導・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。